Sun 8

Summer 2019

茨城県
東茨城郡
茨城町

まちと
つながり

Sun 第八号　二〇一九年七月二十日発行　企画・発行　いばらふるさとサポーターズクラブ事務局　iba3@town.ibaraki.lg.jp　TEL 029-240-7126

Sun

茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である涸沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です

撮影場所:奥谷地区 弁天池

闇が去り 光が照らす その僅かな間

朝曇(あさぐもり) 静寂に包まれ 凛とした顔を見せる

蝉声 深い森に木霊(こだま)し 地が賑やかになる頃

大暑を引き連れ 陽が高みを目指し登っていく

Sunは 茨城町と ゆるやかにつながる いくつもの縁を

人々の暮らしや情景と共に 綴り 伝えていきます

茨城県
東茨城郡
茨城町

Sun 08

Summer 2019

Contents 目次

03 特集 一旅する

10 まちで暮らす人
まちを想う人

15 長岡名物みそまんじゅう
素朴なあの味を守り続けて

17 連載 マチのケシキ

18 編集室から

Cover
写真／竹内慎 モデル／松浦陽菜
“夏 夜の足音”
街を優しく照らし出す灯。
外を歩くと、ふと夜の帳に包まれ
遠く夜の果てへ連れていってくれる。
夏は、そんなわくわくにも似た気分にさせられます。

特集

旅する

その土地で暮らす人々の営み
季節や時間によって移りゆく　風景や空気
足を運び　ふれあい　息吹を感じる

旅することで得られるさまざまなもの
それは　誰かにとっての当たり前の日常

そう考えると　私たちの身近なところにこそ
旅の意味が見つかるのかもしれません
まちが見せる　さまざまな表情を
時とともに巡っていきます

写真｜アラタケンジ　文｜二川ナオミ

09:00 南栗崎地区

ひっそりと架かる沈下橋

その橋は涸沼川に架かっていた。

欄干のない橋は軽自動車がギリギリ一台通れるくらいの幅。沈下橋と呼ばれるこの橋は、川の水位が上がった時に流されないように、あえてこのようなつくりをしているのだそう。町内には涸沼川に架かる沈下橋が三カ所あるらしい。橋から少し身を乗り出して下を見ると、魚の群れがのんびりと泳いでいる。

橋のまわりはとても静かで、今にも水面から河童が出てきそうな雰囲気。しばらく橋の上から川を眺めていたけれど、結局誰も来なかった。この橋は一体いつ使われるのだろう。

ウグイスの鳴き声だけが響いていた。

7 10:00 木部地区
初夏の水田を歩く

遠くの畑にジャガイモの白い花が咲いている。

木部地区のとある田んぼでは、辺りよりも少し遅めの田植えが行われていた。路肩に停められた軽トラックには野口ライスの文字。荷台にはトレーに入った苗が積まれている。

軽く水が張られた田んぼの上を、田植え機がゆっくり滑るように苗を植えていく。時々植え損じた列ができるが、女性が慣れた手つきであっという間に植え直していく。

「うちの田んぼは全体で八町歩(*)くらいあるから。自分のとこの土地だけじゃなくて、頼まれて作っているとこもあるからね。毎日田植えだよ」。トラックの荷台から次にセットする苗を降ろしながらおじさんが言った。町歩なんて滅多に耳にしない単位に戸惑うが、きっとものすごく広いのだろう。今日の田んぼは二反五畝くらいの広さで、モチ米の苗を植えているのだそう。自分は会社をリタイアしてからこの仕事をするようになったとか、昔の田植えはどうだったとか、身の回りには食べられる野草がたくさんあるなど、田んぼのことから思い出話まで、気さくにいろいろな話をしてくれた。

田植えがひと段落するころ、みなさんが一息入れるというのでお茶にお邪魔させていただいた。先ほどのおじさんが近くの林から紅葉のような緑色の葉と黄色い実が付いた枝をとってきてくれた。キイチゴだそうだ。子どものころによく口にしたそうだが、私は見るのも食べるのも初めて。酸味は少なく優しい甘さだった。

*：1町歩≒1ha
野口ライス　茨城町木部658-1　029-292-4569

田んぼのあぜでお茶をする時間は
初夏の風物詩であり
人々のコミュニケーションの場でもある

12:00 小幡地区 変わらないパンの味

町内を巡っていると、時間はもうお昼。

小幡地区の立原パンに立ち寄る。〝柏もち〟と書かれたビラが張られた戸を引いて中に入ると、カウンターを兼ねた味のあるガラスケースが目に入る。一番目立つケースの上には柏餅と目玉焼きパンが置かれ、ケースの中にはあんぱんやクリームパンといったどこか懐かしいパンが所狭しと並んでいる。

「いらっしゃい」。しばらくして店の奥からニコニコしながら出てきたのは立原洋子さん。この店は洋子さんがお嫁に来た昭和二〇年代に、亡くなったご主人と一緒に始めた店。当時、茅葺屋根だった住居の一部を改築して現在の造りにしたのだとか。昔は地元の高校にもパンを卸していたのだそう。今は息子さんが週に二日、木曜日と日曜日に店で売る分のパンを焼いているのだと教えてくれた。どのパンもおいしそうでついつい目移りしてしまう。少し悩んで、キーマカレーパンとクリームパン、目玉焼きパンを買うことにした。洋子さんの指が算盤を弾く。「ハイ、二六〇円ね。お客さんは安すぎる、って言うのだけどね」と笑いながらパンを手渡してくれた。

14:00 馬渡地区 初代町長が暮らした家へ

敷地を囲う生垣からガラス窓が目を引く二階建ての建物が顔を出していた。正面には大きくて立派な長屋門があるお屋敷は、いかにも地元の名士の家という雰囲気。

門の奥には、平屋建ての母屋が見えた。「どうぞ」と迎えてくれたのは現在こちらを管理している雨谷一宇さん。聞けば茨城町の初代町長である雨谷俊夫氏の生家なのだそう。母屋は明治時代に建てられたもので、外から見えた二階建ての建物は大正時代に増築されたもので、主に隠居として使われていたのだと教えてくれた。この日はちょうど、近所に住むという叔母夫婦が庭の手入れに来ていて、草刈りの合間に「ここに芭蕉って書いてある石があるんだよ」と話してくれた。

石には「春もやや 景色調ふ 月と梅　ばせお」という松尾芭蕉の俳句が刻まれている。昔の人々もこの家の庭を見ながら俳句を詠んだりしたのだろうか。歴史を物語る建物は今も雨谷家の人々の手によって大切に守られていた。

17:00 小鶴地区 趣のある看板建築

その後小鶴地区へ足をのばすと、こどもやと描かれた大きな看板が目を引くお店が。よく見ると建物の正面が洋風の〝看板建築〟と呼ばれる建物。店内に足を踏み入れると、水あめや粉ジュース、酢イカなど、懐かしいお菓子やおもちゃがたくさん並んでいる。

迎えてくれたのは二代目の藤田洋子さん。小さな子どもから大人まで常連のお客さんがポツリポツリとやってくる。「大変だけどね、来てくれるお客さんがいるから、いろいろ努力しているのよ」と洋子さんは明るく笑う。昔は店の奥の部屋にゲーム機が置かれ、小中学生もたくさん来ていたのだとか。お話を聞きながらちびっこにまざってお菓子を選ぶ。お会計を済ますと、おまけを一つ袋に入れてくれた。

立原パン店　茨城町小幡1278-1　029-292-0722　　こどもや　茨城町小鶴105　029-292-0368

19:00 中石崎地区
星空と夜風を感じる場所

太陽が沈み始めたころ。

涸沼自然公園キャンプ場には遠くで走り回る子どもたちの賑やかな声が響き、数組の家族がキャンプを楽しんでいた。そんな中、青々とした芝生の広場に、ひときわ目を引くピンと張られたタープがあった。タープの下にはテントと椅子、テーブルが置かれ、焚火台の上には内側から燃える丸太が堂々と一本立っていた。

「これはね、スウェーデントーチ。火をつけてから三〜四時間は燃え続けるんだよ」と教えてくれたのは笹目亨さん。ほぼ毎週キャンプをするという笹目さんにとって、森に囲まれながらも空が広いこの場所はお気に入りのキャンプ場なのだとか。ここで料理をし、音楽を聴き、本を読むなど、ただただゆっくりと過ごすのだそう。

準備や片付けが大変では？とたずねると、「どうやったら綺麗に効率よくできるのか考えるのも楽しいんだよ」。と教えてくれた。一つひとつの動作を研究しながら楽しんでいるようだ。

いつの間にかトーチの片側が燃え尽きようとしている。辺りはすっかり暗くなり、空には星が出ていた。

つながりを これからも

まちで暮らす人
CRAFT REFLECTION 代表　通野崇

まちを想う人
株式会社フェイス デザイナー　平沢美晴

まちで暮らす人 まちを想う人

写真／竹内慎　文／米村優子

Feeling & Thinking

Life goes on

今回のまちで暮らす人 まちを想う人は、二月に公開した茨城町プロモーションビデオ「つながりとひと」の制作に関わった通野さんと平沢さん。お互いのこれまでとこれからの話、プロモーションビデオ（以下ＰＶ）制作でのエピソードをうかがいました。

つくる、見る を求めて

平沢　茨城町のＰＶに関わったのは、以前からいば３の活動に参加していたので自然な流れでした。ＰＶの監督は高校時代の友人でもあり、監督から美術制作の相談を受け、おもしろそうだなと思いお手伝いをさせていただきました。私が通野さんと初めてお話したのも、確かいば３のイベントでしたよね？

通野　そうですね。いば３が初めて開いたオフ会「いば３Spring Meeting」で、僕が撮影をしていた際にご挨拶したのかな。それまで茨城町とはほぼ接点がありませんでしたが、この撮影が縁で、ＰＶでカメラを回すことになりました。

平沢　ＰＶの協力は美術制作のみだと思っていましたが、撮影初日に様子を見に現場へ行くと、その場でカチンコを渡され、そのまま撮影に参加することに…。

通野　監督が平沢さんは撮影スタッフと感覚が近いと思ったようで、その場でお願いされていましたよね。僕もそれは内心感じていました（笑）。平沢さんは今はご実家でお仕事をされていますが、小さいころから何かをつくるのが好きだったのですか？

平沢　小さいころは、自分が子どもなのになぜか子どもが苦手で、家で漫画を描いたりしていました。両親に絵画展や美術展へ連れられていたからか、写真や絵画の模写をするのも好きでした。

中学生になり、おしゃれにも興味が出はじめ、ひとりで好きな洋服を買いに行くようになりました。高校時代は共通の趣味を持つ人たちと知り合い、みんなで都内のクラブで遊び、バイクに乗ったりとアクティブに過ごしていました。そんな中、卒業後の進路を考えた際、漠然とデザインの勉強がしたいと思い、デザイン科が新設されたばかりの県内の短大へ進学しました。なるべく早く社会に出たい、という気持ちもあったので、二年間がちょうどいい期間だと思って。短大では彫金や陶芸、映像、デザインなど、表現の技術に触れていました。通野さんはどんな子どもだったんですか？

通野　僕の生まれは山間の町だったので、夏になると友達と海パン一枚で岩から川へ飛び込むようなやんちゃ坊主でした。

子どものころは、あまり社交的な性格ではなく絵が好きでした。小学生の時は部屋で黙々とアニメのキャラクターを描いていました。勉強は苦手でしたが、図工の時間はとても好きでした。当時流行っていたテレビ番組などもよく見ていましたし、家族が映画好きだったので、洋画や邦画が日常的に部屋で流れていました。

中学時代は電車で街へ出るようになりました。年の離れた兄の影響で、音楽やファッションに惹かれていき、このころの興味や体験したことが、今の僕の土台になっているんだと思います。

その後、高校の授業で、パソコンを使って絵を描けることに感動し、それがきっかけで、デザインの勉強をするために専門学校へ進学。学校での授業の傍ら、友人のバンドのフライヤーなどの印刷物をつくっていました。

回り回って、原点回帰

平沢　デザインに興味ですか…なんとなく私と近い感じがありますね。

実は私、舞台役者を志した時期がありました。ドラマ「やっぱり猫が好き」の女優さんたちのように、美醜に関係なく演技で人を惹きつける役者に憧れがあったんです。それを諦めきれず、短大卒業後に上京したんです。

上京後、劇団のオーディションにはすんなり合格しました。けれども、劇団運営の現実を見た途端、それまでの熱がサーッと引いてしまい、早々に役者の道を諦めました（笑）。その後、学生時代に少しかじったデザインの道に進むのもいいかなと思いはじめました。新宿のビジネススクールでＤＴＰ（*）を学び、留学斡旋会社のホームページ制作のアルバイトをしながら就職活動をするも梨の礫。結果、デザインの道も諦めることにし、一年ほどで茨城へ帰ってきました。

その後、さまざまなアルバイトを転々とする中、いい加減ちゃんと就職したら？と心配した友人に勧められ、看板の制作会社に就職しました。私の実家は看板屋ですが、看板のことなど全く興味がありませんでした…が、突然看板のデザインと実制作を任されることとなり、とりあえずやるしかないな、と思いました。

通野　…いい感じにブレぶれでおもしろいですね（笑）。

平沢　そうですね。潔さが私の長所!!なんだと思います。

通野　僕もこれまで決して真っ直ぐな歩みではなかったですよ。

デザインを学んではみたものの、結局自分は何がしたいのかわからないまま専門学校を卒業してしまい、そのまま流されるようにニートになりました。同じ境遇の友人と実家の部屋に籠り、目的もなくテレビから垂れ流されるミュージックビデオをだらだらと見続ける日々。そのまま二カ月ほど経ち、いい加減このまま何もしないのはまずいと思い、知人から紹介された不動産会社に就職しました。

不動産会社では賃貸物件の管理を担当していましたが、正直やりがいを感じられず、早々に辞めようかなと思いはじめたある日、会社で使う販促物の制作を頼まれ、パソコンでチラシやポスターなどをつくっていました。その仕事が思いのほかおもしろく、僕はやはりデザインがやりたい、と思い直し、不動産会社を辞め、アルバイトをしながらデザインの道を模索しはじめました。

その後、アルバイト先で知り合った友人から制作会社を紹介され、入社することになりました。ようやくやりたい仕事ができると思っていましたが、入社後まもなく、社長から「通野くん、映像の仕事できる？」と声がかかりました。これまで、無意識に映像へ触れていたからか、気がつくと「できます」と答えている自分がいました。

平沢　デザイナーかと思ったら、まさかのカメラマンデビューがここだ。

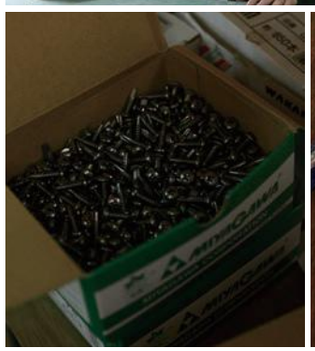
通野　そうなんです。撮影や編集を一から教わりながら、ブライダルの撮影編集からはじめました。映像に関わり約八年の間、企業映像をはじめ数多くの案件を形にしていく中、ステップアップを考えていたところ、これはもう独立する流れに動いているんだなと感じ、会社を設立し今に至ります。

平沢　すごい、覚悟を決めたわけですね。

通野　こう振り返ってみると、なんとなく流れがある、と思わざるを得ないです。

平沢　平沢さんは、家業を継ごうと思ったきっかけは何だったのですか？

平沢　いずれは家業を継ぐのかな、と頭の片隅では考えていましたが、前職を五年ほど勤めたころ、いよいよそのタイミングが来たというか。



＊：DeskTop Publishing（デスクトップパブリッシング）の略。パソコン上で印刷データの作成、印刷を行うこと

通野崇（つうのたかし）　1982年茨城県山方町（現常陸大宮市）生まれ、茨城町長岡在住。
映像・デザインプロダクションにてブライダルや企業映像の制作を担当。2017年にCRAFT REFLECTIONを設立。
茨城町プロモーションビデオの撮影、編集を担当。　craft-reflection.com

通野　もし自分の代になったら、やりたいことなどは考えているのですか？

平沢　実家は看板の下地づくりをメインにしています。このまま私が会社を継ぐことになったら、今の仕事に加えて、今回のＰＶで関わったような舞台美術や大道具の制作をやってみたいと思っています。

納得がいくまで考え、つくりあげる意味

通野　監督からの映像制作の依頼をいただいたとき、茨城町はやんちゃな人が多い（笑）という先入観がありました。実際に撮影をはじめ、町の人との関わりが増えていく中、みなさんあたたかい人柄で撮影にも協力的で。特に奥谷地区にある弁天池のシーンでは、地区の人たちがいろいろと準備をしてくれて大変助かりました。

僕自身、今回のような町のＰＶ制作は初めての経験でしたが、いば３の活動がベースにあったので、撮影スタッフとコミュニケーションが取れ、イメージの共有や作品の具体的なゴールも明確だったと思います。インパクトだけが先行して見飽きられてしまうような映像ではなく、繰り返し長く見てもらえるような作品ができたと思います。

平沢　涸沼を舞台にするなら、町の天然記念物であるヒヌマイトトンボをモチーフにしたものを加えたらどうかなと、自由にアイデアを出し合ってつくりあげた作品だと思います。

私が制作した青と黄色の大きいオブジェですが、人が実際に触ってもけがをしないように丈夫で軽い素材にしたりと、検証と工夫を重ねました。

通野　撮影や編集は正直大変ではありましたが、学ぶことも多かったです。たくさんの人たちが涸沼に集うシーン、あの規模の撮影はなかなかできないと思いますし、農家さんと主人公が出会うシーンで、突然ズームになるカットがあるのですが、通常カメラマン的には使わないカットをこれでいくと監督が指示を出したんです。これでいいんだと驚きましたが、映像の世界観に合っていれば印象的な画の方が確実に心に響くし、正しい画かどうかは見ている人が決めることだからと聞いて、なるほどと思いました。

その後も何度もブラッシュアップを重ね、納得がいくまで妥協せずとことん考えぬくことの大切さを感じました。今振り返ると、制作の時間は次のステップへの手応えにもなったと思います。自分が形にするものは、人と一緒にはしたくないという気持ちが根底にあるので、その感覚が合う人たちと制作に関われてよかったと思います。

つながり、そしてひと

平沢　そういう意味では根矢涼香さん（ＰＶの主演女優）が主人公で本当によかったです。私、根矢さんの雰囲気のある、言うならば平成生まれの昭和顔なところが好きなんです。もし今どきのアイドルみたいな子が主演だったら、こっちがソワソワしちゃったかもしれない。

通野　根矢さんのいい表情が撮れたなと思います。根矢さんも私の笑っている数少ない作品だと言っていましたね。

平沢　マシコタツロウさんの曲（僕は涸沼 君はメロン）もよかったですよね。

通野　マシコさんも映像ありきで曲をつくるのは初めてだったそうですね。僕もできあがってきた曲に負けないような編集ができるか心配でしたが、結果的に曲と映像が上手く合わさり、一つの形になったと思います。

平沢　制作スタッフをはじめ関わった人たちが一丸となった作品だと思います。私自身、映像制作の現場を体感し、美術制作をはじめ助監督やさまざまな経験をしたことで、今後もいろいろとやってみたいと思うようになりました。

通野　撮影や編集の技術も、まだまだできることがたくさんあると思うので、またこの制作チームで、今回とは違った映像作品をつくってみたいです。

平沢　もし次回作があるのならば、是非やってみたいです。

通野　次回作、必ずやりましょう。茨城町さん、ご検討どうぞよろしくお願いいたします。ＰＶで撮っていない場所もあるので、いつでも大丈夫ですよ。例えば、町の職員さんが主演のホラーものはどうでしょう（笑）。

平沢　きっと根矢さんも喜んで出てくれるんじゃないかな（笑）。

通野　今回のＰＶ撮影のように、今後もこの町をきっかけにした映像やいば３のイベントなど、楽しいことがつくれたらと思っています。

平沢　三、四〇代って、いろいろな意味で人生で一番脂が乗っている時期だと思うんです。なので、勢いのある世代がいろいろとできるんだぞというところを見せたいんです。みんなとつながって楽しみながら、新しい活動にチャレンジしていきたいと思います。

通野　僕は奥さんが茨城町出身ということもあり、仕事やいば３でも町とつながり、結果的に町民となってしまいました。次の世代を巻き込んだゆるいつながりが、もっともっと広がっていったらおもしろいですね。

撮影：根矢涼香・茨城町

平沢美晴（ひらさわみはる）　1980年茨城県東茨城郡茨城町生まれ、現在水戸市在住。
看板制作会社でデザインや制作を手がけた後、実家の株式会社フェイスに入社。
茨城町プロモーションビデオの美術、助監督を担当。　kanban-face.com

長岡名物 みそまんじゅう

～素朴なあの味を守り続けて～

写真｜アラタケンジ　文｜ホシカワリエコ

もあもあと立ちのぼる蒸気に、甘く漂うあのにおい――。

六〇年以上前から茨城町の長岡地区にある、みそまんじゅう屋さんの場景です。お話をお聞きしたのは、藤屋製菓二代目のお嫁さんであるお母さん。すでに八〇歳を超え、普段は店先には出ていないとのことですが、この日は特別にお店に立っていただきながら、これまでのことを振り返っていただきました。

まんじゅう屋さんに嫁いで

お店の歴史はお母さんが嫁ぐ前から始まっています。戦争から帰ってきた先代が、茨城県石岡市の和菓子屋さんで修行し、茨城町の長岡坂下に藤屋製菓を開店。その後、先代の息子さんがお店を継ぎ、お見合い相手だったお母さんがお嫁にやってきました。

嫁いだ当時は朝から晩まで立ちっぱなしで忙しく、みそまんじゅう以外に冠婚葬祭用のまんじゅうをつくるほか、箱詰め作業などもありました。お子さんが生まれるその日も、節句用のまんじゅうを折箱に詰める作業に追われ、お腹が痛いのを我慢し、すべての作業を終えてから夜更けに病院へ行ってお産をしたそうです。

「まんじゅうというのは、人が生まれてから亡くなるまで、人生の数々の節目に用いられるものだったんだよ」とお母さんは教えてくれました。

田植えの合間にみそまんじゅう

「昭和四〇年代ころは、常澄村（平成四年水戸市に合併）のほうから田植えが始まって、それが終わると茨城町に田植えの手伝いに来てくれていたんだよ。今みたいな機械もあまりなかったからね。それで田植え作業の合間に食べるからと、みんながお店に買いに来てくれていたの」。

この辺りでは今でも田植えの時期、シートを広げてひと休みする光景が見られるそうなのですが、その時の農家さんのお茶うけは、もしかしたらみそまんじゅうなのかもしれませんね。

変わらない素朴なあの味を求めて

「昔は忙しくてね、一番売れた時は一日に一万二千個も売ったの。今はそんなに出ないけどね」とお母さんは言いますが、お話をお聞きしている間もたくさんのお客さんがガラガラとガラス戸を開け顔をのぞかせます。「はい、いらっしゃい。ひとつ？ふたつ？」と大きなみそまんじゅうがぎっしり詰まったパックを手に「まだあったかいよ」と渡すお母さん。

近所の農業大学校の卒業生が用事があって近くまで来ると、俺は何期卒業なんだよとお店に寄ってくれたり、探し求めていた本当のまんじゅうの味に出会えたよ、ありがとう、と他県から電話をくれたりするお客さんもいるそう。六〇年以上長く愛され続けている理由をたずねると「飽食の時代だけど、やっぱり昔ながらの素朴な味だからいいんだろうね。それから、大事なのは変わらないこと。派手なことはやらない。普通がいいんだよ」。

みそまんじゅうを守り続けて

お店は現在、三代目の方が現場を切り盛りしていますが、実はもう四代目も決まっているとか。「孫が菓子の学校に行って後を継ごうかなって言っているんだよ」。

お母さんにとって〝命〟だというみそまんじゅう。素朴な味をずっと守り続けてきたお母さんの想いは今、しっかりと次の世代に受け継がれているようです。

茨城町のお土産といえば…あのみそまんじゅう！と誰もが思い浮かべる〝長岡名物みそまんじゅう〟。ずっと変わらず町にある、ほっこりあったかい素朴な味に会いに来てみませんか。

藤屋製菓　茨城町長岡1803　8時頃～18時頃（無くなり次第終了）。

ibamachi-kankou.jp/buy/434

こどもやさんでの思い出を探しています。

今号の特集やSun4号の表紙、
茨城町プロモーションビデオ「つながりとひと」にも登場した
「こどもや」さんが、今年の8月末をもって閉店となり
半世紀以上の長い歴史に幕を閉じるそうです。
そこで、当クラブにて、こどもやでの思い出の写真やエピソードを募集し、
みんなの思い出として、WEBサイトにて掲載します。
今までの思い出を下記メールアドレスまでお送りください。
メールアドレス：iba3@town.ibaraki.lg.jp
件名：こどもやの思い出 ※ペンネームを記載下さい。
締切：8月18日(日)
たくさんのエピソードをお待ちしております。

From Sun －編集室から－

Sun 第8号をお届けします。
今回のテーマは「旅する」。町の中で普段過ごしていても、使う道はいつも同じ。そこを少し変えるだけでも新鮮な景色、場所と出会えます。町の中にも、まだまだ旅できる場所はあるのかも。みなさんもお気に入りの場所を見つけるため、たまには違う道を通ってみるのも楽しいですよ。［ひで③］／蛍狩りの唄で「ホーホー蛍来いこっちの水は甘いぞ」云々が知られているが、決して砂糖水のような甘みのある成分を好んで集まるわけではないようです。［KABA3］／夏の時季に聞こえる蛙の声を聞くと、涼しげな雰囲気に包まれるのと同時に、町内にいるという安心感が。ただ一つ不思議に思うのは、蛙たちが一斉に鳴きだしたかと思えば、ピタっと鳴き止むあの瞬間。周りの様子を伺いながら、自己主張しているのかと思うと、微笑ましく思えたりします。［243］／プロモーションビデオのテーマソング「僕は涸沼君はメロン」を、ふとしたときに口ずさんでいます。気づいたら1曲丸ごと歌っていることもあるのですが、音痴な歌声が誰かに聞かれていないか無性に心配になります。［がっきー3］／ふと道の始まりと終わりが気になり、国道6号の始点から終点までを原付で走破する旅をしたことがあります。旅する目的は、些細なほど心に残ります。目的が無いなら、いっそ目的を探す旅に出てみてはいかがでしょうか。［YANNA3］

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。
いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト　town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2019年12月発行予定です。

Sun 第8号 夏号　2019年7月20日発行
企画・発行：いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
［茨城町 町長公室 秘書広聴課］
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL：029-240-7126
MAIL：iba3@town.ibaraki.lg.jp
編集・アートディレクション・デザイン｜i,D
取材・出筆｜二川ナオミ 米村優子 ホシカワリエコ 石川聖太
写真｜アラタケンジ 竹内慎
絵｜やまなかももこ
印刷・製本｜株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.
Special Thanks［順不同］
松浦陽菜さん 笹目亨さん 雨谷一宇さん 野口ライス
立原パン店 こどもや 株式会社フェイス 藤屋製菓

“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は
いばらきまちがつくるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場。
設立から3年目を迎え、
会員数は750名を突破!
ますます盛り上がる“いば3”と
みんなでつながろう!!!

お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

いば3 WEBサイト　茨城町プロモーションビデオ“つながりとひと”

連載
マチのケシキ
第8回 季節の音、町に響く
絵｜やまなかももこ 文｜石川聖太

絵：やまなかももこ
画家。絵本作家。女子美術大学卒。
絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
主な作品に「田んぼのいのち」（くもん出版）、
「俳万智3・11短歌集 あれから」（今人舎）など。
momokomo.net

夜の田園に延々と響く蛙の合唱。
毎夜、オーケストラのように唄っているのかもしれませんね。

初夏、野山に芽吹いた草木たちが若草色から深緑へ色合いを深めていくころ、それに合わせるかのように、町内に響く音も少しずつ変わっていきます。

まず耳に入ってくるのは、たくさんの生物たちの鳴く声。庭先でビィ～と鳴くクビキリギスやオケラをはじめとする虫の声はもちろんのこと、軒先で親を呼ぶツバメの雛、朝夕にけたたましく声を上げるキジ、深夜には森の奥からアオバズクが優しく囁きます。

田んぼにたくさんの水が入り、空を鏡のように映し出すと、その美しさに呼応するかのように、土から出てきた蛙たちが一斉に鳴きはじめます。藍色の夜と規則的に並ぶ街灯が映る田んぼに響きわたる蛙たちの合唱は、幻想的な風景をより一層引き立ててくれます。田んぼの近くの家で育った人は、寝る際に部屋の窓を開け、蛙たちの声が聞こえると落ち着いて眠れる、という話を聞いたことがあります。そのほかにも蝉の声や、笛や太鼓のにぎやかな祭ばやし、打上花火の響音や夕立の雷鳴など、これから夏にかけて聞こえてくる音は、実に楽しげでもあり、一方で神秘的、叙情的でもあると思います。

この連載を書いている夕暮れ、いつの間にか梅雨入りを知らせるような大粒の雨が窓を叩きはじめました。車が道路を走るサーッという音も不規則に耳へ入ってきます。

日々の情景や季節を語る上で、音は大切な要素。暮らしの中に聞こえるたくさんの音にあらためて意識を向け、流れていく季節をより深く感じ、誰かが創った音楽ではない〝音〟そのものに想いを馳せることで、心が豊かになるきっかけになるのではないでしょうか。